

<共同研究報告>

授業と成績に関する満足層と不満層の分析 —— 国際学部学生アンケート調査から ——

荒井 宏 祐

A Classification Analysis of the Level of Satisfaction with the Curriculum of the International Studies Department

Hirosuke Arai

Various characteristics of those satisfied and those dissatisfied with the curriculum of the International Studies Department, have been analyzed on the basis of a questionnaire given to the students belonging to that Department at Bunkyo University in Japan.

1. The difference between those satisfied and those dissatisfied has been observed in their degree of eagerness to study five subjects.
2. For those students who are satisfied with their personal achievement in general-education subjects, the percentage of those satisfied with their achievements in the four other subjects, including the specialized subjects, is also high. Thus, it is concluded that general-education subjects contain important factors that determine whether or not a student will be satisfied with university life.
3. The survey shows that further efforts are desirable to give more thorough individual guidance to students in the dissatisfied group and also to improve the methods of classroom-teaching for such students.

はじめに

'92年12月から'93年1月にかけて、国際学部の1～3年生を対象に（4年生は調査当時在籍せず）、学習・生活の改善に関する基礎資料を得るため、全数調査を実施した。調査の計画と結果の概要は、本紀要別掲の小林ほ

かの論文（「国際学部学園生活調査報告」）に報告されている。

この小稿では、①履修科目や学系の選択、②履修計画作成にかかわる参考情報、③出、欠席の状況、④学習技術と学習困難事項、⑤授業の進め方や学習サポート指導、⑥実用科

目、資格講座新設の要望など、学習・生活に占める主要な問題について、授業や自己の成績に満足感をもつ層（満足層）と不満を感じる層（不満層）の両層がどのような意識と行動上の特性を示しているか、分析を試みた。この二層は、いわば大学生活に適応的な層とそうでない層がもつ相違を示すようにも思われ、その意味では大学教育があらたに当面することとなった課題ともかかわる問題点を含むものと考えられる。

また、'91年の大学設置基準改定以来話題となっている一般教育科目は、この層別分析によってみると、学習・生活にどのような位置づけをもつものと示唆されるかについても触れてみた。

なお、今回の調査は全数調査であり、属性差の有意差検定は行っていない。僅差比較も可能だが、文中では有効サンプル数やデータの全体分布等を勘案して、10%以上の差のあるものを中心に、傾向を確認するための参考として、5%以上の差があるものとりあげ、相違の所在を示唆することにした。

以下に示す結果は、あくまでも始めて試みられた単一の調査事例から導き出されたものであり、今回指摘しえた傾向や両層間の相違については、今後継続的な調査と分析によって確認を要するものであることを、最初にのべておきたい。

1 満足層と不満層の定義と分布

(1) 定義と全体的分布

授業についての満足度を科目区分別に、次の5段階で尋ねてみた(Q8 参照)。

- ア 満足のゆく授業がほとんどである
- イ どちらかといえば、満足のゆく授業の方が多
- ウ 満足のゆく授業とそうでない授業とは大体半々である
- エ どちらかといえば、不満を感じる授業の方が多

オ 不満を感じる授業がほとんどである

このうち、ア+イを授業満足層、ウを授業満足・不満半々層、エ+オを授業不満層の三つにパターン化した結果を、一般教育、英語、第二外国語、保健体育、専門科目の5区分について比較するとともに、1科目区分あたりの平均値を試算したものが図1である。

授業満足層の多い科目の上位3位は、①保健体育(53%)、②第二外国語(47%)、③英語(40%)で、一科目区分あたりの平均値(39%)を下廻るものは、専門科目(35%)と一般教育(20%)である。一方授業満足・不満半々層は、同様に①一般教育(44%)、②英語(33%)、③専門科目(32%)で、平均値(31%)を下廻るものが、保健体育(22%)と第二外国語(22%)である。さらに授業不満層は、①一般教育(33%)、②第二外国語(26%)、③英語(25%)で、保健体育(19%)と専門科目(16%)は平均値(24%)を下廻っている。

ここで授業満足度の科目区分別順位づけを行うため、前記の5つの回答選択肢ア~オにそれぞれ5点、4点、3点、2点、1点を与え、各回答者実数に乗じた結果をみると、①保健体育(1,740点)、②第二外国語(1,644点)、③英語(1,642点)、④専門科目(1,491点)⑤一般教育(1,443点)、となった。今回の調査では、授業満足度に関して一般教育と専門科目が他に比べて不評であることがわかる。

2, 3年生を対象に、それまで(1年次と2年次)に獲得した成績が自分にとって満足のゆくものかどうかを科目区分別に、次の5段階で尋ねた(Q12)。

- ア 満足している
 - イ まあ満足している
 - ウ あまり満足していない
 - エ 満足していない
 - オ どちらともいえない
- このうちア+イを成績満足層、ウ+エを成

績不満層，オを回答保留層としてパターン化する
 こととともに，1科目区分あたりの成績満足
 と不満の平均値を求めてみた（図2）。成

績満足層の多い上位3位は，①保健体育
 （73%），②英語（60%），③第二外国語
 （59%）で，1科目区分あたり平均値（61%）

図1 授業満足・不満層等の分布
 —科目区分別—

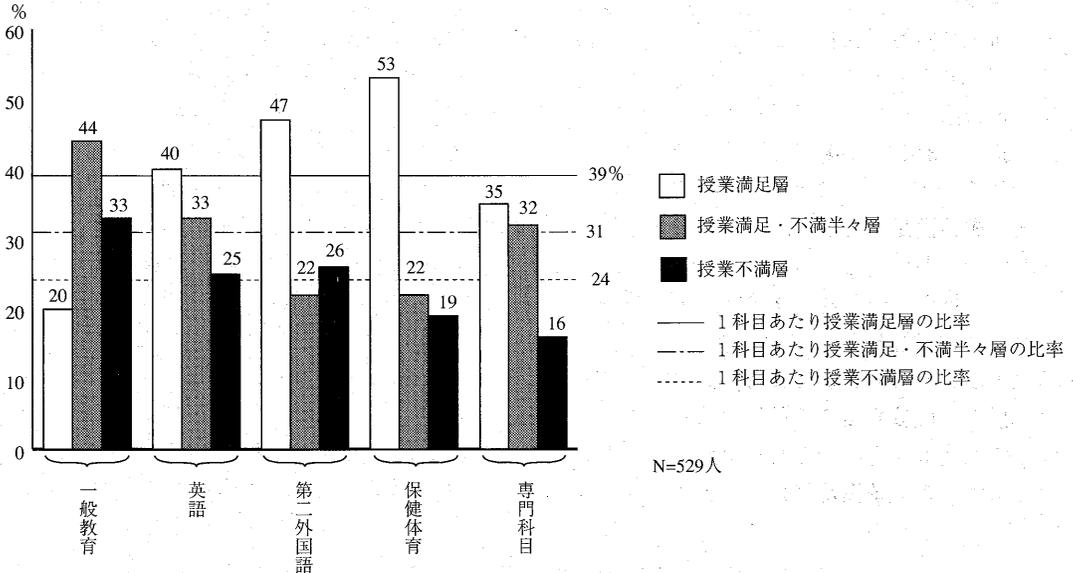
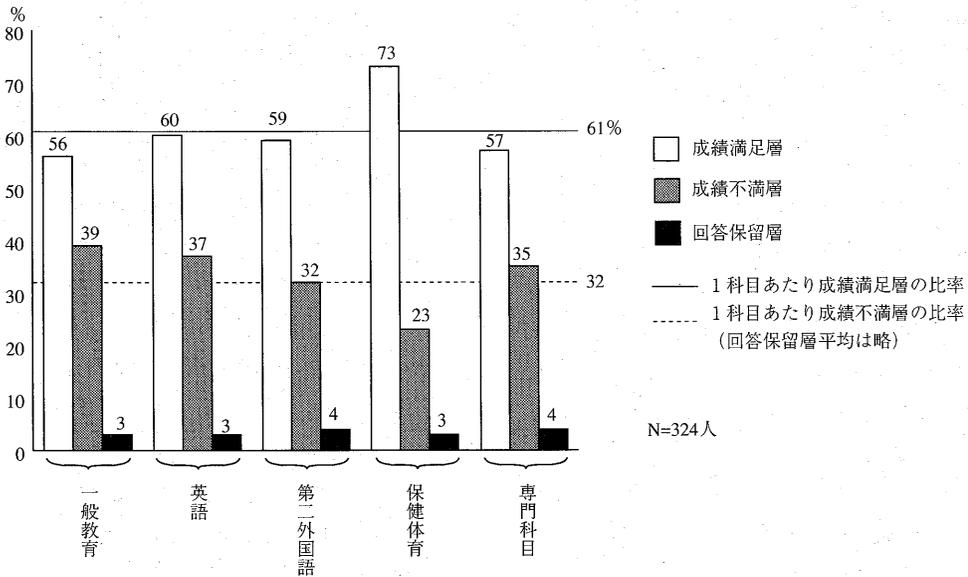


図2 成績満足・不満層等の分布
 —科目区分別—



を保健体育以外の4つが下廻っている。また成績不満層では同じく①一般教育(39%)、②英語(37%)、③専門科目(35%)が上位3位を占めており、平均値(32%)を下廻っているのは、保健体育(19%)のみである。

成績満足度の科目区分別順位づけをみるため、前記の回答選択肢のうちア～エの4つに、それぞれ4点、3点、2点、1点を与えた結果(オは除外)では、①保健体育(940点)、②英語(863点)、③第二外国語(831点)、④一般教育(809点)、⑤専門科目(792点)となり、成績満足度でも、専門科目と一般教育が低いことがわかった。

(2) 性別、学年別、学系別、入試方法別の属性分布

表1が、その分布状況である。まず性別では、授業、成績両面で5科目全部にわたり、女子の満足層が男子のそれを上廻っている。とくに女子の成績満足層は、全区分を通じ6

割以上と多く、また男子との差が10%以上あることが特徴的である。この結果は、いわば予想通りで、男女差の規模や程度が、今回初めて数字の上で確認されたともいえよう。学年別では、授業満足層を科目区分別にみると、専門科目ではさすがに2・3年生の方が1年生より2倍近く多いこと、また英語に関しては、学年を追うごとに満足層が減少していることがわかる。

学系別(2～3年)では、成績満足層が体育以外の4科目区分で、多い順に①文化、②関係、③経済と並ぶ傾向がみられる。

最後に入試方法別では、「付属」と「留学生等」はサンプル数が少数なので、とりあえず「学力」と「推薦」の両層の満足層を比較してみると、授業、成績の両面ではほぼ5科目区分にわたり(第二外国語の成績面をのぞく)、「学力入試」で入学してきた層よりも「推薦入試」で入学してきた層の方にどちら

表1 授業と成績の満足・不満層の属性分布(科目区分別)

%

		満足層										不満層									
		授業					成績					授業					成績				
		一般	専門	英	二外	体育	一般	専門	英	二外	体育	一般	専門	英	二外	体育	一般	専門	英	二外	体育
性別	男	18	31	35	43	48	45	48	50	53	68	40	23	28	27	24	49	42	43	36	25
	女	23	39	44	50	58	67	64	69	64	78	26	11	22	24	15	30	28	30	28	20
学年	1	20	22	47	43	30	—	—	—	—	—	33	19	20	28	37	—	—	—	—	—
	2	22	43	39	56	52	56	58	61	61	75	34	13	23	17	5	40	33	36	31	22
	3	20	43	30	38	41	56	55	58	56	70	31	18	36	34	13	37	38	37	34	24
学系(2・3年)	文化	33	43	33	61	67	74	70	76	63	76	26	11	20	20	6	26	28	24	33	24
	関係	16	41	33	43	67	55	57	58	61	72	37	13	34	29	11	41	35	39	32	25
	経済	22	45	39	50	69	48	50	55	54	73	31	19	24	19	6	42	38	40	31	19
入試方法別	学力	18	31	38	45	48	52	53	60	61	68	41	22	27	30	24	44	39	37	33	28
	推薦	20	37	43	51	61	63	60	63	60	78	25	9	23	21	15	34	33	35	34	18
	付属	29	35	27	50	74	64	60	52	64	92	9	9	18	24	3	32	32	44	32	8
	留学生等	33	60	55	41	45	48	67	56	33	67	19	10	19	12	14	37	22	37	22	22

注 小林ほかの「調査報告」表1をまとめたもの。母数はそれぞれの属性別有効回答数(ただし成績、学系は2・3年のみ) なお、別途試算した、入試方法別で「付属」と「留学生等」の母数は50人以下

かという満足層が多い傾向がうかがえる。満足度に関わる要因には複雑なものがあるが、今後「学力入試」の補欠入学者の追跡調査など、ひきつづき分析を加える必要があろう。

(3) クロス集計による四層の分布

2～3年生の授業満足層と同不満層をそれぞれ100として、成績満足、不満層との関連をそれぞれ二パターンに分けてみたものが図3である。

まず授業満足層では授業にも成績にも満足している層が、5区分を通じて授業満足層の7割以上を占めている。一方授業には満足しているが成績には不満をもつ層が、各区分を通じて授業満足層の2割台以下となっている。

科目区別にみる一つの特徴は、授業不満層の内訳をみると英語に関しては、授業には不満だが成績には満足している者が、5科目区分で授業不満層中もっとも多いことである。

2 勉学志向にかかわる両層の差異分析

(1) 勉学志向の濃淡差

学園生活目的を尋ねた(Q4)結果を、授業満足層と不満層別にみると、第1位を占めた項目に相違があらわれた。満足層は5区分を通じてすべて「豊かな教養」をあげている(表2)。一方不満層はやはり5区分を通じてすべて「青春・自由」をあげている。まずこの結果から、この両層間にはいわば勉学志向に濃淡の差があることがうかがわれた。この点を確認するため、次に「科目選択理由」との関連をみた(表3)。

両層間に差がある理由は、授業満足層では「時間割の関係」という物理的制約をのぞくと、「科目への興味」が5区分共通に授業不満層より多い。また成績満足層では、英語、体育をのぞく3区分について同じ傾向がみえる。さらに「先生への親しみや尊敬」も一般教育と専門科目で、授業、成績満足層とともに多くあらわれている。満足層は不満層よりも、概して科目選択にあたって科目内容への

図3 授業満足・不満と成績満足・不満との関連 (科目区分別)

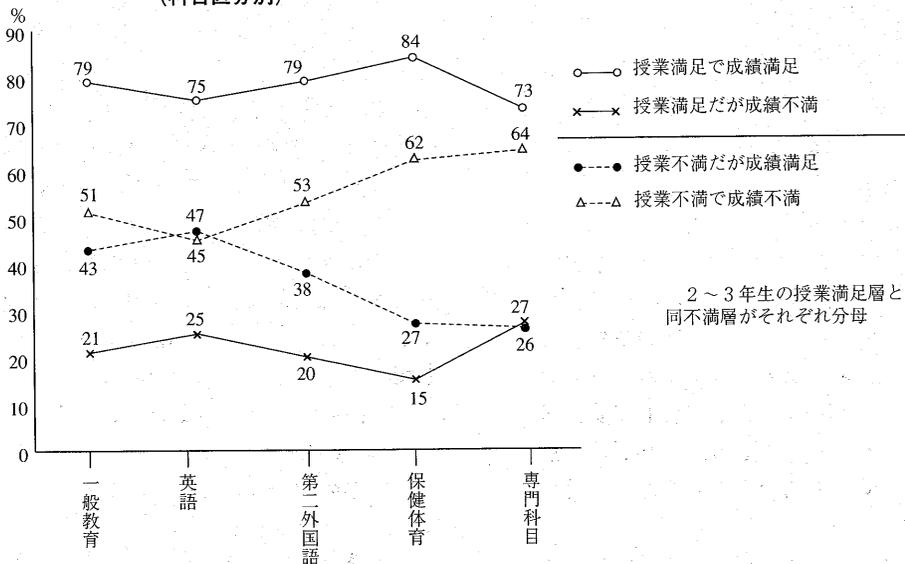


表2 授業満足・不満層の学園生活目的 第1位 (科目区分別) %

項目	一般教育		専門科目		英語		第二外国語		保健体育	
	満足	不満								
	豊かな 教養	青春・ 自由								
	65	52	65	47	67	50	63	52	59	57

注 複数回答

表3 授業と成績の満足・不満層の科目選択理由 (科目区分別)

両層間に5%以上の差があるもの %

層別	科目区分	一般教育	専門科目	英語	第二外国語	保健体育
満足 ✓ 不満	授業	科目への興味 83>62	時間割の関係 82>75	時間割の関係 82>75	時間割の関係 84>79	時間割の関係 85>77
		先生への尊敬 22>15	科目への興味 77>58	科目への興味 75>64	科目への興味 75>70	科目への興味 75>64
	成績	時間割の関係 85>78	時間割の関係 84>79		時間割の関係 85>78	
		科目への興味 75>70	科目への興味 75>66		科目への興味 75>69	
不満 ✓ 満足	授業	単位のとりやすさ 36<45	単位のとりやすさ 38<43	出欠がノーチェック 8<18		
		出欠がノーチェック 8<13	出欠がノーチェック 11<17			
	成績	単位のとりやすさ 41<46	単位のとりやすさ 40<50	単位のとりやすさ 40<48	単位のとりやすさ 42<47	出欠がノーチェック 10<16
		出欠がノーチェック 10<15				友人と一緒に 8<18

数値は満足層と不満層の順で表示 (以下同じ)

興味や教員の学識、人柄への尊敬、親しみの有無といった点を重視しているようである。

一方不満層が満足層より多い理由は、「単位のとりやすさ」(体育以外の成績不満層に共通のほか一般教育と専門の授業不満層)、「出欠ノーチェック」(第二外国語以外の4区分)などである。不満層は満足層よりもいわば楽勝的な科目かどうかを重視して履修科目を選択する傾向があるようで、両層間の勉学志向の濃淡差があらわれているものと思われる。

なお、学年始めの履修計画作成時の参考情

報を尋ねた(Q5)結果では5区分を通じて、「とくに参考にするものはない」が満足層よりも不満層に多い。また、参考情報の内容を各層別にみた表4でも、両層間に差がある参考情報の出現数が延計32対11と、不満層は満足層のほぼ $\frac{1}{3}$ であり、履修計画作成に寄せる関心の強弱差がうかがわれる。

また内容的には、満足層はどちらかという「講義概要」や「履修の手引き」、「第1週目の授業の印象」など大学側が公式に提供しているものを重視しているのに対し、不満層は「教務オリエンテーション」などがあるも

表4 授業と成績の満足・不満層の履修計画参考情報（科目区分別）

両層間に5%以上の差があるもの %

層別	科目区分	一般教育	専門科目	英語	第二外国語	保健体育
満足 ✓ 不満	授業	講義概要 85>65 履修の手引き 55>50	講義概要 78>59 履修の手引き 56>43 時間割 75>70 第1週目授業 50>38	講義概要 73>69 履修の手引き 54>44 時間割 76>63 先輩友人情報 60>50 第1週目授業 48>40	講義概要 74>68 時間割 76>70 学内情報誌15>9 第1週目授業 52>39	講義概要 75>66 時間割 77>62 先輩・友人・情報 57>49 第1週目授業 53>34
	成績	講義概要 81>66 時間割 82>75 第1週目授業 63>44	第1週目授業 61>45	講義概要 78>71 時間割 83>73 第1週目授業 61>45	講義概要 80>65 時間割 82>76 第1週目授業 58>50	講義概要 80>63 時間割 81>73 第1週目授業 57>49
不満 ✓ 満足	授業	先輩友人情報 47<58	学内情報誌12<17			学内情報誌9<23
	成績	先輩友人情報 49<58	履修の手引き 46<51 先輩友人情報 48<57	先輩友人情報 49<56	先輩友人情報 49<57 教務オリエンテーション 13<19	先輩友人情報 50<58 教務オリエンテーション 14<25

の、傾向としては「先輩、友人の情報」などいわば非公式情報、資料を重視する者が多いことがうかがわれる。

さらに表5では「欠席理由」との関連をみた。

満足層が不満層よりも多くあげた理由は、授業、成績の両面を通じて「病気・忌引き」（延計6件）、「バスの混雑」（延計3件）、「クラブやサークル」（計1件）の三つである。一方不満層の方が多い理由は、「授業がつまらない」（延計8件）、「朝寝坊」（延計4件）「出欠がノーチェック」と「アルバイト等」（各延計3件）、「バスの混雑」（延計2件）それに「友人とのつきあい」（計1件）となっている。

両層に共通にみえるのは、「バスの混雑」で通学バスの問題が両層の悩みのタネであることがうかがわれる。しかしそれ以外では、「病気・忌引き」などやむをえない欠席理由が満足層に多いのに対し、「出欠ノーチェッ

ク」など、とてもやむをえないとは思えないものが不満層に多く、これも両層間の勉学志向の濃淡差をうかがわせるものと思われる。

最後に、学系選択理由との関連をみよう。今回の調査では、授業と成績の満足、不満と学系選択結果の自己評価との関連はわりに薄く、両層とも5区分を通じて「良かった」または「まあ良かった」とする層が6割以上と多数を占めた。

両層間に相違があるのが、学系選択理由である。

表6をみると満足層が多くあげる理由は、「勉強したい科目が多い」（延計10）、「学系の特色」（延計6）などで、「面白そうな印象」（延計2）、「就職を考慮」「履修科目の難易度」はそれより少ない（各計1）。一方不満層が多くあげる理由は、「面白そうな印象」（延計4）「友人と一緒に」（延計2）「志望人数の傾向」（計1）である。このうち「面白そうな印象」は前述の通り満足層にもあり、両

表5 授業と成績の満足の不満層の欠席理由 (科目区分別)

両層間に5%以上の差があるもの %

科目区分		一般教育	専門科目	英語	第二外国語	保健体育
満足 √ 不満	授業	病気, 忌引き 37>19 バスの混雑28>19	病気, 忌引き 31>23 バスの混雑27>16		病気, 忌引き 29>15	病気, 忌引き 26>19
	成績	病気, 忌引き 33>24	クラブやサークル 12>5		バスの混雑24>18	病気, 忌引き 30>25
不満 √ 満足	授業	授業がつまらない 30<61 出欠がノーチェック 23<33	授業がつまらない 36<56 出欠がノーチェック 28<32 アルバイトなど 13<23	授業がつまらない 41<53	授業がつまらない 45<55 朝寝坊 59<65 出欠がノーチェック 25<33	授業がつまらない 43<56 バスの混雑21<28
	成績	アルバイトなど 12<20 朝寝坊 58<69	アルバイトなど 13<21 友人とのつきあい 9<14 朝寝坊 60<68 バスの混雑20<27	授業がつまらない 41<46	授業がつまらない 41<47	授業がつまらない 41<48 朝寝坊 59<69

層共通の学系選択理由となっているようである。しかし、全体の傾向としては、満足層はどちらかという学系の特色や勉強したい科目にひかれて学系を選択している節がみられる。一方不満層にはそうした様子は薄く、「友人と一緒に」などを重視しているようである。これらからすると、学系選択理由にも勉強志向の濃淡差があらわれているものと理解されよう。

(2) 勉強志向の濃淡差がもたらすもの

ここでもう一度科目選択理由との関連をみた、表3にもどり、今度は授業(満足、不満)と成績(満足、不満)との関係に注目してみよう。まず授業満足層が同不満層より多くあげている理由と成績満足層が同不満層よりも多くあげた理由とで共通なものが多いことに気がつく。例えば「時間割の関係」以外でも、「科目への興味」が英語以外の4区分で、またこれに「先生への親しみや尊敬」を

加えた二つでは一般教育と専門教育で二層共通となっている。これはこうした理由で科目を選択した結果が、授業への満足感のみならず、この2区分では成績上の満足感にもつながることを示唆するものであろう。一方授業不満層が同満足層より多くあげる「単位のとりやすさ」または「出欠ノーチェック」は、成績不満層の比率が高い理由となっている。これらは、いわば楽勝志向で科目を選んだ結果が必ずしも授業あるいは成績上の満足感に結びつきにくいことをうかがわせるものであろう。

こうした傾向は、欠席理由との関連をみた表5にもあらわれているようである。即ち、すでに触れたように「病気・忌引き」などのやむを得ない理由での欠席は、授業や成績の不满にはつながらず、逆に「授業がつまらない」「アルバイトなど」「朝寝坊」等の欠席理由は、授業のみならず成績面の不满につながっている様子がうかがわれる。つまり勉強志

表6 授業と成績の満足・不満層の学系選択理由 (科目区分別)

両層間に5%以上の差があるもの %

層別	科目区分	一般教育	専門科目	英語	第二外国語	保健体育
満足 ✓ 不満	授業	勉強したい科目が多い 62>56	学系の特色55>39 先生の学識26>10 勉強したい科目が多い 61>48	学系の特色55>39 勉強したい科目が多い 64>47	勉強したい科目が多い 61>45	必修科目の難易度 11>5 勉強したい科目が多い 58>51 面白そうな印象 39>32
	成績	学系の特色54>45 勉強したい科目が多い 58>47 先生の学識23>14	学系の特色53>42 勉強したい科目が多い 59>47 面白そうな印象 43>38	学系の特色57>40 勉強したい科目が多い 61>42	学系の特色55>45 勉強したい科目が多い 58>41	就職を考慮34>21 勉強したい科目が多い 56>47
不満 ✓ 満足	授業	面白そうな印象 33<42		面白そうな印象 36<42	面白そうな印象 35<43	
	成績			友人と一緒に6<13 面白そうな印象 38<46	友人と一緒に7<14	志望人数の傾向 5<10

向の薄さが当然のことながら授業や成績への不満を残す結果に終わっているものと思われる。

以上、学園生活目的意識、科目選択理由、履修計画参考情報、欠席理由、学系選択理由の5項目と満足層、不満層との関連をみた。今回の分析では、この両層間に勉学志向あるいは意欲の濃淡差があることがうかがわれた。そしてその差異は、学系選択や成績面などにも影響をもつことが示唆された。大学の大衆化の中で、大学での学習には必ずしも適応的とはいいいにくいこの層にどう対応していくかが、一つの課題となるのではあるまいか。

3 満足層と不満層の学習技術

この両層が学習にさいして採用しているテクニックが何かをみたのが表7である。

ここでは授業満足層が同不満層よりも多く用いている学習技術は、延計25件と他の3層よりかなり多く(成績満足層延計16, 授業不満層延計3, 成績不満層延計4), この層が多様なテクニックを利用して勉学にあたって

いる様子がうかがわれる。5区分に共通にあらわれているのが、「大事だと思ふ所は、とくに熱心にきき、要点をノートする」で、この“要点ノート”技術が授業満足感とかかわる共通技術であることが示唆される。また授業不満層との差もわりに大きく、体育の9%差をのぞく他の4区分で10%以上である。とくに一般教育と専門科目ではそれぞれ28%, 27%と大差があり、とりわけこの2区分の授業満足と関係が深いようである。

次に多いのが「ノートは科目別にとる」と「テキストや配付資料、自分のノートの大事な所に線や印をつけながら読む」で、英語あるいは第二外国語以外の4区分にあらわれている。また「予習をする」が、一般教育、英語、第二外国語に、「自分で辞書や辞典を引いたり、図書館などで詳しく調べる」が、一般教育と専門科目に、そして「疑問のある点は、先生や先輩、友人にきく」が、一般教育と第二外国語に、さらに「先生の顔をみながら話をきく」が専門科目と体育の授業満足層

表7 授業と成績の満足・不満層の学習技術 (科目区分別)

両層間に5%以上の差があるもの %

層別	科目区分	一般教育	専門科目	英語	第二外国語	保健体育
満足 ∨ 不満	授業	要点をノート 71>43 科目別ノート 71>58 テキストに線 36>23 図書館 29>19 先生等にきく 19>13 予習 26>21	要点をノート 66>39 テレビ等から 44>29 科目別ノート 68>53 テキストに線 37>26 図書館 27>18 先生を注視30>25	要点をノート 57>46 テレビ等からも 39>34 科目別ノート 70>53 予習 30>20	要点をノート 57>46 テキストに線 30>23 先生等にきく 20>13 予習 27>20	要点をノート 58>49 テレビ等からも 38>29 科目別ノート 65>60 テキストに線 33>21 先生を注視29>22
	成績	科目別ノート 74>53 要点をノート 64>46 テキストに線 40>26	科目別ノート 73>53 要点をノート 62>50 テレビ等からも 42>32 図書館 27>21	科目別ノート 70>58 要点をノート 61>48 テレビ等からも 40>35 図書館 28>20 予習 20>13	科目別ノート 71>55 要点をノート 58>50 予習 19>13	科目別ノート 70>52
不満 ∨ 満足	授業	テレビ・新聞・本 ・雑誌等からも 25<40		テキストに線 24<30		予習 20<31
	成績	テレビ・新聞・本 ・雑誌等からも 36<41 先生を注視26<37			先生等にきく 16<21	予習 15<26

にそれぞれ多くなっている。これらの結果は、各科目区分での授業満足感とかかわりのある学習技術の所在を示唆しているものと思われる。

成績満足層が同不満層よりも多くあげられている学習技術は、いわば自分が満足しうる成績をあげるのに有用な学習技術をうかがわせるものであろう。「科目別にノートをとる」は5区分全部に出ており、これが成績上の満足感にかかわる、基礎的な共通要素であることが示唆される。ついで「要点をノート」が体育以外の4区分に、また「予習をする」は、授業満足層と同じく英語、第二外国語という語学関係科目区分に共通にあらわれており、外国語学習における「予習」の重要性をうか

がわせている。「図書館等で詳しく調べる」は専門科目と英語にあらわれているが、この2区分にもう一つ共通にあらわれているのが、「授業以外にも、テレビ、新聞、本、雑誌などで知識を得る」である。このことは、自分が満足しうるような成績をあげられるような、勉強意欲に富む学生は、マスコミが伝える知識、情報、解説にも興味を示し、それが専門科目のレポート作成や英語のテキスト内容の理解などに役立っていることを示唆しているものとも思えよう。

なお、授業と成績の両方の満足層に同じようにあらわれているため、両方の満足感を得るのに共通の学習技術とみられるものもある。ほぼ5区分共通にみられるものには「科目別

ノート」があるほか、「要点をノートする」、「テキストに線や印をつける」があり、これらの学習技術習得の重要性がうかがわれる。

一方不満層が満足層よりも多くあげる学習技術を見ると、まず全体の数が延件数で満足層の17% (7対41) と少なく、この層の勉強志向の濃淡差を改めて示している。科目区別の傾向で注目されるのは、「テレビ、新聞、本、雑誌等で知識を得る」が、前述の通り専門科目と英語の授業と成績両方の満足層に多くあらわれている一方で、一般教育の授業と成績双方の不満層にも共通にあらわれていることであろう。

一般教育に不満をもつこの層が、知識吸収を補う方法としてマスコミに依存している様子は、これが9技術中唯一、授業満足層と大差(15%)をつけていることから知られる。しかしそれが必ずしも満足すべき結果と結びついていないことは、同じ項目が成績不満層に多いことから知られよう。このことは、単にマスコミばかりに依存しては不十分で、やはり「要点をノートする」など授業内容に即した地道な努力が欠かせないことをうかがわせるものであろう。

なお、「疑問のある点は、先生や先輩、友人にきく」が第二外国語で、授業満足層にあらわれているとともに、成績不満層にも見出し出され、指導の難しさをうかがわせている。

4 両層の学習困難事項

さて満足層と不満層は、一方でどんな学習上の困難点を感じているであろうか。

表8がその結果だが、まず目立つのは授業満足層にその数が多い(延計16)ことで、他の3層(授業不満層延計6, 成績満足, 不満層がともに延計7)よりも10件程度上廻っている。ここからは、授業に満足しているといってもそこには多くの問題点が隠されている様子がうかがわれる。なかでも多いのが体育で、この科目区分には図1, 2で示したよう

に、授業、成績の両面で満足層が多いが、学習困難事項も、またこれらの合計で延計7件と、5区分を通じもっと多い(他区分は延計3~6件)。

次に困難事項を内容的にみると、「先生の声や黒板の字が小さくて、ノートがとりにくい」が専門以外の4区分に共通してみられるほか、「授業のスピードが早く、ついていきにくい」、「質問しにくい雰囲気があり、わからないままになりやすい」、「授業のレベルが高くて理解しにくい」が2区分ないし3区分に共通してみられる。これらの点は、いってみれば教員側の配慮でかなりな程度解消に向うものと思われる。一方学生側に原因があると思われる事項として、専門科目の「まわりがうるさくて、話が聞きとりにくい」(授業満足と成績不満の両層に多い)などがあげられよう。

成績満足層が、同不満層よりも多くあげる事項としては、「授業のスピードが早く、ついていきにくい」が英語以外の4区分に共通してみられる。成績面で満足できる成果をあげたものの、その過程では自分にとって早すぎる授業スピードに悩んだ学生がいる様子がうかがえよう。

一方授業不満層が同満足層よりも多くあげている点では、「授業の内容に興味がもてない」が英語、第二外国語の語学関係以外の3区分共通にみられ、この層が当該の科目区分の授業内容に十分な動機づけを感じていないことが示唆されよう。その他英語の授業不満層には「話にまとまりが多いので、話のつながりがわからない」などが多い。

また成績不満層に多い事項の内容をみると、「声や字が小さくてノートがとりにくい」「質問がしにくい」「話にまとまりがない」など教員側にかかるとみられる問題点もあげられている。

表8 授業と成績の満足・不満層の学習困難事項 (科目区分別)

両層間に5%以上の差があるもの %

科目区分		一般教育	専門科目	英語	第二外国語	保健体育
満足 ▽ 不満	授業	声小さくてノートがとれない 43>35 まわりがうるさい 28>17 スピードが早い 22>11 質問しにくい 20>15 レベルが高い 21>12	まわりがうるさい 25>15 レベルが高い 18>10	声小さくてノートがとれない 41>35 テキストがなくノートがとりにくい 27>19 質問しにくい 21>14	声小さくてノートがとれない 44>30 テキストがなくノートがとりにくい 24>15	声小さくてノートがとれない 44>38 スピードが早い 19>11 レベルが高い 18>8 欠席が多くて話のつながりが不明 11>5
	成績	スピードが早い 24>16	スピードが早い 23>15		テキストがなくノートがとりにくい 24>14 スピードが早い 22>13	内容に興味がない 56>49 テキストがなくノートとりにくい 23>15 スピードが早い 22>12
不満 ▽ 満足	授業	内容に興味がない 48<68	内容に興味がない 43<60	話にまとまりがない 32<40 欠席が多くて話のつながりが不明 6<22	質問しにくい 16<22	内容に興味がない 53<58
	成績	声小さくてノートがとれない 37<43	声小さくてノートがとれない 34<46 まわりがうるさい 19<25 レベルが高い 13<20		内容に興味がない 52<58 質問がしにくい 15<20	話にまとまりがない 39<44

5 満足層と不満層の授業の進め方への要望

表9をみると、ここでも授業満足層が同不満層より多くあげる要望(延計15件)が他の3層を上廻っている(授業不満層計1, 成績満足層延計8, 同不満層6)。

前述の学習困難事項と同じ傾向にあることは、彼らが授業に満足感を抱いているものの、内心その内容、方法に少なからぬ要望を秘めていることが知られよう。なかでも5区分共通にみられるものが「授業以外の場でも、学

生との個人的接触、対話をもっと積極的にしてほしい」である。この種の要望は、私立大学連盟の調査でも、また文教大学の全学部調査でも上位にあるとのことであるが(小林勝法「文教大学教員の教育改善に対する意向と実態、文教大学教育研究所紀要NO2, 1993)、国際学部に関しては、開学以来アドバイザー制(1年生)、プレゼミ制(2年生)が実施されている。本調査での自由回答記述欄をみると国際学部は「アドバイザーや内容について良いものを持っている」という意見

表9 授業と成績の満足・不満層の授業への要望（科目区分別）

両層間に5%以上の差があるもの %

科目区分		一般教育	専門科目	英語	第二外国語	保健体育
満足 √ 不満	授業	個人的接触を 34>26 学生の反応に配慮 を 44>31	授業方法の改善 64>56 研究活動の話 32>22 個人的接触を 36>27 学生の反応に配慮 を 35>28 私語にきびしく 13>8	授業方法の改善 71>54 個人的接触を 39>27 学生の反応に配慮 を 37>28	授業方法の改善 72>57 個人的接触を 31>26	授業方法の改善 68>63 個人的接触を 31>25 学生の反応に配慮 を 36>27
	成績	授業方法の改善 68>63	個人的接触を 32>27 質問・対話の時間 を 15>10 研究方法の話も 26>20	個人的接触を 34>25	授業方法の改善 68>61	授業方法の改善 68>58 学生の反応に配慮 を 39>29
不満 √ 満足	授業					研究方法の話も 21<28
	成績	研究活動の話も 24<29 個人的接触を 27<35		授業方法の改善 64<69	研究方法の話も 20<28	研究活動の話も 23<34 個人的接触を 28<36

がみられる反面、「アドバイザー制も形だけじゃちっとも役に立たん」との意見がある。こうした制度の円滑な運営のためには、教員、学生、大学当局三者の協力が必要であることは、本紀要 NO 2 所収の筆者らの共同研究報告（「大学1年生と留学生に対する個別の指導、相談活動の展開について」荒井宏祐、小林勝法、戸田三三冬）でも指摘を試みたことがある。本調査で学生側に「個人的接触、対話」を求める声が高いことは、学生側がこの制度を十分に利用しきれていない様子が見え、利用促進上一段の工夫が求められるよう。

次に5区分共通にみられるのが、「プリントやビデオを活用するなど、授業方法をもっと工夫して、勉学意欲が高まるようにしてほしい」あるいは「学生の反応や理解のスピー

ドにもっと気を配ってほしい」で、いずれも学習の主体である学生側の事情に即ちその配慮を求める声が高いものと理解できよう。

成績満足層では、一般教育、第二外国語、体育の3区分に共通して「授業方法の改善」を求める声が高く、このニーズが授業のみならず、成績に満足している層にも根強いことが知られる。また専門科目の成績満足層には、「個人的接触」を求めるニーズのほか「授業の中で質疑応答や対話の時間をもっと設けてほしい」「研究の結果だけを教えるのではなく、どのように研究したのか、研究のステップや方法についてももっと話してほしい」が多いほか、同科目区分の授業満足層に「出席した学会や発表論文の内容など、研究活動のことをもっと話してほしい」が多いのは、他の科目区分よりも、より専門的に深く立ち入

った話題を求めているものとも推測できよう。
一方不満層だが、表10にみる通り授業不満層には授業への要望は「とくにない」とする

ものが5区分を通じて満足層より多い。この層には、授業の内容や方法についての関心の薄さがうかがわれる。

表10 授業への要望が「とくにない」とする満足・不満層の比較（科目区分別）

層別		科目区分					%
		一般教育	専門科目	英 語	第二外国語	保健体育	
授 業	満足層	3	5	5	6	5	
	不満層	12	16	14	13	16	
成 績	満足層	6	6	6	5	5	
	不満層	5	5	4	8	8	

しかし成績面では、この両層に5区分を通じて5%以上の差は認められず、こと成績に関してはさすがにこうした気持ちは影をひそめているようである。この相違は、表9の下段にみえる授業と成績不満層の要望数の差（1件対延計6件）にもあらわれていよう。成績不満層に多い要望は、専門科目以外の4区分でそれぞれ「個人的接触」「研究活動の話も」（一般教育と体育）、「授業方法の改善」（英語）、「研究方法の話も」（第二外国語）となっている。

6 両層にみる、学習活動のサポート指導と実用科目、資格講座の新設要望

(1) 学習サポート指導の要望

学生からその学習活動そのものを支える指導が求められている様子を表11に示した。

もっとも多くの要望をもつ層が授業満足層（延計16件）で、他の3層をここでも上廻っている（同不満層延計2、成績満足層延計9、同不満層延計7）。授業満足層は、これまで見てきたとおり、もっとも多くの学習技術を身につけているがその一方で人一倍学習上の困難も感じており、そのためか授業の進め方に対する要望のみならず、自分達の学習活動そのものを支援する指導についても要望するところが多いものとみられる。これらはいづ

れも彼らの勉学意欲の高さを示唆するものとみることもできよう。

表11全体で5区分共通にみられるのが、「参考書の探し方」であり、4区分共通の要望では「辞書や参考文献の使い方」「レポートの書き方」である。これらは、入学初期に早目に大学生として習得しておくべき学習上の基本技能とも思われるが、その学年別分布をみると、「参考書の探し方」をのぞく、他の二つはむしろ1年生から2、3年生に進むにつれて増加する傾向がある（「参考文献の使い方」が1年12%、2年18%、3年23%。「レポートの書き方」が同じく39%、48%、52%）。また、専門と体育に多い「本や資料の読み方」も同様の傾向にある（同じく19%、23%、27%）。以上のような基本的な学習技能のサポート指導の要望が多くの科目区分にみられることと、また学年を追うに従ってそのニーズが高くなることは、大学入学期における準備（治療）教育の重要性とその内容を例示しているものとも思われる。

なお、上記の「参考書の探し方」「参考文献等の使い方」「レポートの書き方」「本や資料の読み方」は、科目区分上の違いはあるものの成績満足層にも見受けられる。

一方不満層が満足層よりも多くあげている要望の件数は、前述の授業への要望と同様に

表11 授業と成績の満足・不満層の学習サポート指導に関する要望（科目区分別）

両層間に5%以上の差のあるもの %

層別	科目区分	一般教育	専門科目	英語	第二外国語	保健体育
満足 √ 不満	授業	レポートの書き方 49>42 参考書の探し方 33>28 ノートのとり方 19>11	レポートの書き方 46>39 参考書の探し方 32>23 本・資料の読み方 28>23 辞書・参考書の使 い方 21>12	レポートの書き方 44>39 参考書の探し方 34>21 ノートのとり方 21>7	パソコン・ワーブ ロ、AVの使い方 46>39 参考書の探し方 30>20	レポートの書き方 46>39 参考書の探し方 30>20 本・資料の読み方 24>19 発言・討議のしか た 25>18
	成績	レポートの書き方 55>43 参考書の探し方 34>23 本・資料の読み方 27>21 辞書参考書の使 い方 34>23	レポートの書き方 55>45	発言や討議のしか た 25>20	参考書の探し方 31>26 辞書、参考書の使 い方 25>12	レポートの書き方 52>45
不満 √ 満足	授業	パソコン・ワーブ ロ・AVの使い方 39<45		発言・討議のしか た 18<26		
	成績	パソコン・ワーブ ロ・AVの使い方 36<50 発言・討議のしか た 21<27	本・資料の読み方 23<27 辞書・参考書の使 い方 19<24	本・資料の読み方 21<31		本・資料の読み方 22<32 辞書・参考書の使 い方 18<25

授業不満層が成績不満層を下廻っており（それぞれ延計2対7）、成績面でのサポートの要望がより切実であることがうかがわれる。

科目区分で注目されるのは、一般教育で「パソコン、ワープロ、視聴覚機器の使い方」の指導を求める声が授業、成績の両不満層に共通して多いことであろう。この指導ニーズは、学年別では3年生よりも、1、2年生に4割台と多い（1年43%、2年47%、3年37%）ほか、1年生では全項目中もっとも高くなっている。これらの結果から、こうしたいわゆる“エレクトロニックリテラシー”習得の指導は、大学在学前半期に行われることがのぞましく、またそれは、授業、成績両不満層のニーズにもこたえることとなるものと思われる。

なお、「本や資料の読み方」が成績不満層について専門、英語、体育の3区分共通にみられ、この層が抱えているもう一つの指導ニーズの所在を示唆している。

(2) 満足層と不満層の実用科目、資格講座の新設要望

表12が層別分布の結果である。満足層の方が不満層よりも延件数が多い（授業・成績の合計でそれぞれ計25対11）。これは、5区分全体でこうした新設の要望は「とくにない」とする者が不満層に多いことにも通じる傾向であろう。

授業と成績の両面で、満足層に多く不満層には少ない科目、講座の要望は、「留学講座」「実用外国語科目」「公務員講座」「ツアー・

表12 授業と成績の満足・不満層の实用科目・資格講座開設希望（科目区分別）

両層間に5%以上の差があるもの %

科目区分		一般教育	専門科目	英語	第二外国語	保健体育
満足 √ 不満	授業	留学講座 25>20 コンピュータ資格 講座 38>31 学芸員資格14>9	实用外国語53>39 留学講座 25>20	实用外国語58>44 留学講座 29>23	英検1級等41>36 公務員 31>24	ツアーコンダクタ ー秘書 23>18
	成績	留学講座 25>18 ツアーコンダクタ ー秘書 23>15 学芸員資格15>8	留学講座 25>17 ツアーコンダクタ ー秘書 22>15 教員資格 29>20	ロシア語・ハンゲ ル語 22>14 ツアーコンダクタ ー秘書 22>16 学芸員資格15>7	实用外国語54>45 ロシア語・ハンゲ ル語 22>16 英検1級 42>29	英検1級 39>30 コンピュータ資格 講座 36>25 教員資格 28>21
不満 √ 満足	授業	ロシア語・ハンゲ ル語 13<19 英検1級等32<41	ロシア語・ハンゲ ル語 16<23 学芸員資格10<16	教員資格 23<29 ロシア語・ハンゲ ル語 14<21		
	成績	英検1級 32<41 学芸員資格8<15	コンピュータ資格 講座 31<37	教員資格 23<29		ロシア語・ハンゲ ル語 17<27

コンダクター、秘書講座」の4種類で、とくにこうした科目、講座の新設を満足層が強く求めていることがわかる。

しかしこれをのぞくと、他の科目、講座は出現件数の差はあるものの、満足層、不満層のどちらからもその開設の希望が寄せられている。

なお、英語の不満層では教員免許講座の新設を授業、成績両不満層が共通して求めていること、英語、第二外国語の科目区分では、「英検1級等」あるいは「实用外国語科目」など語学関係の講座、科目の新設要望がとくに満足層に多くみい出される。

7 満足層と不満層の特徴からみた、学習生活における一般教育科目の位置づけ⁽¹⁾

大学の学習生活における一般教育科目の位置づけを、同科目の成績満足層と同不満層(2~3年生)を分母に、他の科目区分の両層との関連をみたのが、図4である。

ここで特徴的なことは、

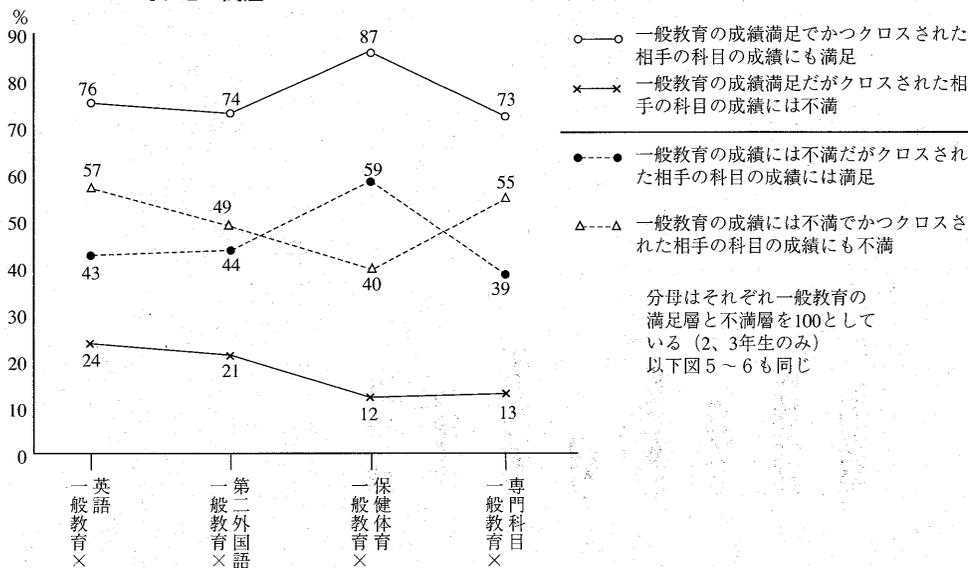
①一般教育の成績に満足している層は、他の各4科目区分の成績にも満足している者が多い。ここからは、まず少なくとも一般教育も成績面で、大学の学習生活に占めるウエイトが大きいことがうかがわれる。

②一般教育の成績に不満な層は、保健体育をのぞく他の3科目区分の成績にも不満をもつ学生が多い。しかし保健体育では、その成績に満足する者の方が不満をもつ者よりも多い。この結果をみると、一般教育の成績不満層にとって保健体育は、成績上のオアシスともいえるような特別の地位をもつことが示唆されよう。

次に、上記①でかい間見えた一般教育のウエイトづけの大きさをさらに確めるため、図5では、一般教育とのクロス集計のさいの分母を交換したらどんな結果が得られるかをみた。

図5のAとA'、BとB'……DとD'をみると、分母を逆にしたからといって、図4で指摘した傾向と全く逆の傾向があらわれるわけではないことがわかる。つまり、自分が満足

図4 一般教育の成績満足・不満と他科目区分のそれとの関連



できるような、良い成績がとれる優秀な学生は、一般教育に限らず大体どの科目区分でも良い成績がとれるというわけである。しかし注目される点は、AとA'……DとD'を一つ一つ比べてみると、一般教育を分母にしたケース(A~D)の方が、そうでない場合(A'~D')よりも、各科目区分の成績に満足している者が多く(AとA'では76%対71%など)、不満層が少なくなる(BとB'では21%対30%など)傾向がみられることであろう。また同じく成績不満層について同様に分析してみた結果が、図6である。

ここでは、図5とは反対の傾向があらわれていることが知られる。つまり、一般教育を分母とした方が、各科目区分の成績満足層が少なくなり(cとc'で59%対30%など)、不満層が多くなる(dとd'で55%対63%など)ことが指摘できる。即ち、満足層では一般教育の成績が良い者は他も良く、不満層で悪い者は他も悪い者が多いというわけである。

以上の分析によれば今回の調査に関する限

り、一般教育科目には他の科目区分に比べて、成績の点で満足できる学習生活を送れるかどうかにかかわる重要な要素が、若干多く含まれている様子がうかがわれる。この背景にはさまざまな条件や要因が作用しているのであろうが、その理由の一つとして、次のようなことが考えられる。つまり、もともと自分が満足できる成績がとれるという意味で優秀な学生は、ほぼどのような科目区分についても良好な成績をあげうる特性をもつ。そしてこの特性がとくに一般教育の成績で比較的強くあらわれるのは、一般教育の内容が人文、社会、自然科学の三分野から総合的に吟味され、組み立てられているほか、レベルや質の面でも、優秀な学生がもつ特性の一つと考えられる強い知的志向をより良く受けとめうる要素をもっている。しかしそうした要素は、知的志向が弱く、満足できる成績を獲得しにくい学生には十分に働かず、これら一般教育不満層は、図4にみるように体育実技を含む保健体育科目に成績満足感を求めている……。

図5 成績満足層について一般教育と他の科目区分とのクロス集計の分母を交換した比率の比較

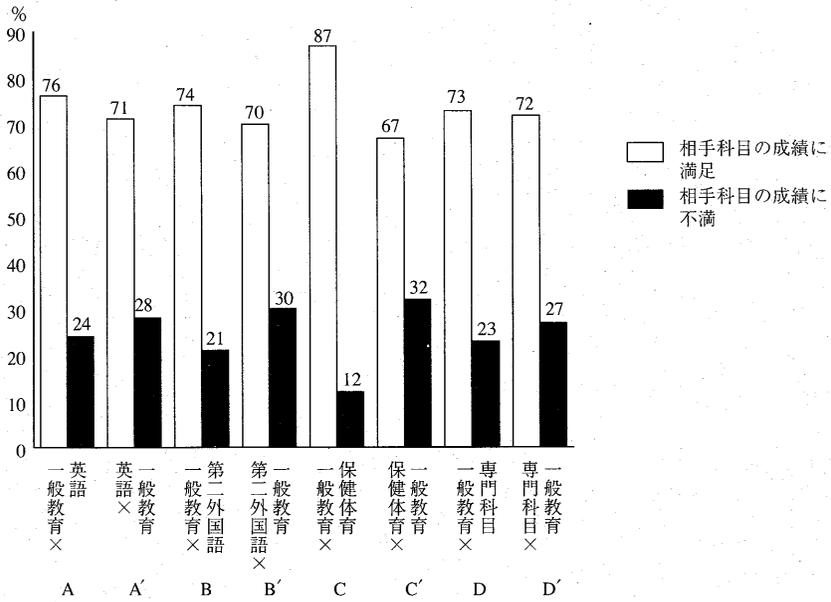
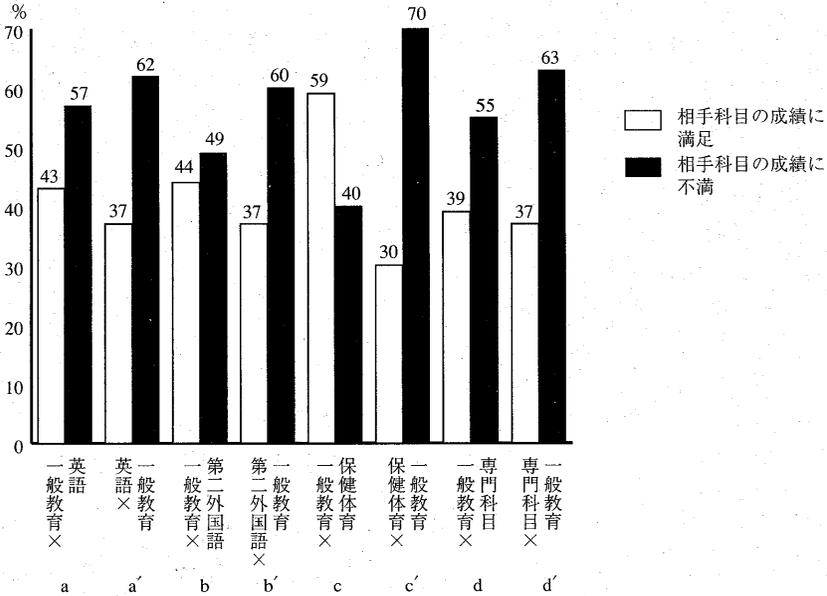


図6 成績不満層について一般教育と他の科目区分とのクロス集計の分母を交換した比率の比較



この仮説からすると、現在大学設置基準の改定に伴って多くの大学で見直しが進められている一般教育は、大学における学習生活の中で軽視しえないウエイトをもつことが改めて示唆され、その再編成にはいっそうの配慮が必要になるともいえよう。しかしこの結果は、単一の調査事例から得られたものであり、その検証のためには今後とも研究をつづける必要がある。とくにこの調査結果が、どちらかというと教養的、学際的性格の濃いカリキュラム編成を重視している国際学部の学生を対象としていることにも関連があるかもしれない、この点も今後の検証課題となろう。

なお、授業に対する出席状況を尋ねてみたが、 $\frac{2}{3}$ 以上出席者が全体の75%、 $\frac{2}{3}$ 未満が25%というのがその結果である。全員に欠席

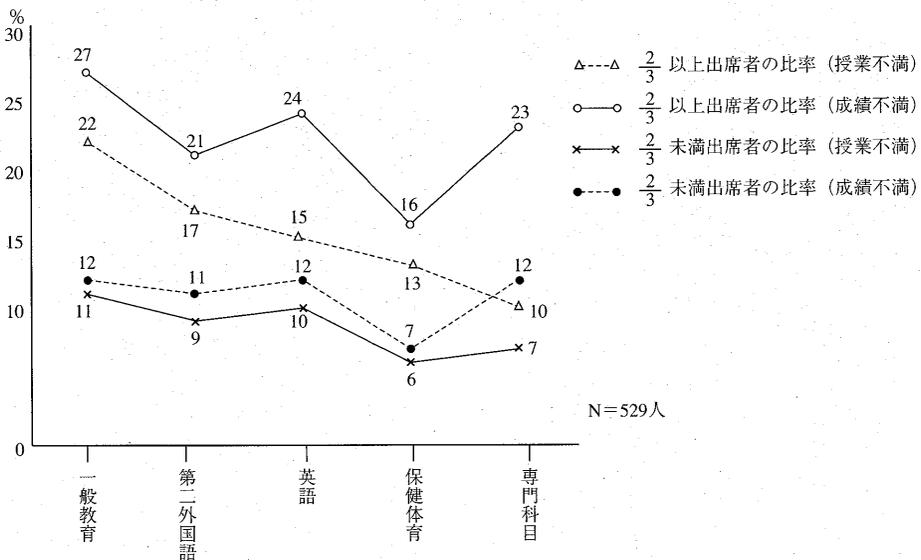
理由を聞いた結果では、第1位が「朝寝坊」(64%)、第2位が「授業がつまらない」(47%)となっている。

また、授業と成績の各不満層と出席状況との関連をみたのが、図7である。

5区分中もっとも $\frac{2}{3}$ 以上出席者の比率が高いのは、授業不満層と成績不満層の両方で、一般教育である。彼らは一般教育に不満は持つものの、おおむね他の科目区分の不満層より出席率が良い。一般教育の内容、方法面での改善をもっとも期待しているのは、おそらくこの層かもしれない。

結びにかえて一新しい大学モデルの構想のために

図7 科目区分別にみた授業および成績不満層の出席状況との関連

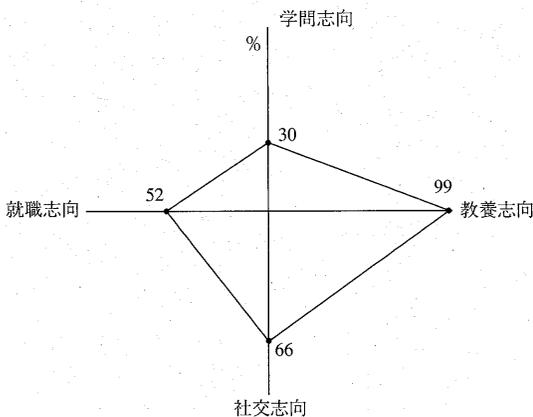


以上、授業と成績の満足、不満層の分布と層別差の分析を試み、国際学部学生の学習と生活にかかわる諸特徴を示すとともに、そこにおける一般教育科目の位置づけを探ってみた。

今回の調査では、前述の通り学園生活の目的を9項目にわたって複数回答で尋ねている(Q4)。その結果について①学問志向か社交志向か、②教養志向か就職志向かという二つの軸のもとに、次の四つの回答パターンを作って、それぞれの回答総%を計算すると、図8が得られた(「その他」と「目的なし」をのぞく)。

- ①「学問志向型」……「学問研究」「専門的知識、技術の習得」 30%
- ②「社交志向型」……「青春・自由を楽しむ」「結婚相手・友人を探す」 66%
- ③「就職志向型」……「有利な就職資格の習得」「大学卒の学歴入手」 52%
- ④「教養志向型」……「豊かな教養の習得」「幅広い素養の習得」 99%

図8 学園生活目的の分布



全体の分布傾向をみると、どちらかというとも学問志向よりも社交志向に、また就職志向よりも教養志向に傾斜しているようで、それ

ぞれの総%の比率は、後者が前者の2倍前後と差がある。

「国際」の名称を含む学部は、概して教養的、学際的性格が強いカリキュラム編成を行っている所が多いとみられるが、上記の傾向には、そうした中で青春を楽しんでいる学生の姿がうかがわれる。

では、新しい大学モデルの構想を考えていく上で、今回の調査結果からどのような検討課題が得られるであろうか。本学部との関連を念頭に置きながら、本文中にも言及した点を含め、以下のようなまとめを試みてみた。

1 勉学志向の薄い不満層への対応策の検討

大学教育の一定水準を維持していくために必要な条件の一つとして、成績不振層の学力向上があげられよう。今回の調査では、満足層と不満層の間に、勉学志向の濃淡差があることが示唆された。

大学の大衆化がさらに進むとなると、あるいは不満層がしだいに増加することも予想できよう。国際学部でも、現在科目区別にて2~3年生の男子で25~49%、女子で20%~30%いるとみられる成績不満層を、満足層に転化できる有効な対応策を今のうちから検討する必要があるものと思われる。

2 一般教育再編成の検討

今回の分析によれば、一般教育は学習生活で軽視しえないウエイトをもつことが示唆された。もし一般教育に勉学意欲に富む優秀な学生の知的志向を、より総合的に受けとめうる要素があるならば、大学設置基準改定を受けた形での、その再編成にあたっては、こうした要素をさらに詳しく分析し、例えば学際性の高い

科目の開設など、それらがよりよく發揮されるように検討を深める必要があるものと考えられる。

3 授業の進め方の改善の検討

現在の大学教育改革の焦点の一つは、「何を教えるか」から、「いかに教えるか」への関心の移行であろう。本調査においても、授業の進め方への要望が多くみられた、勉学志向に濃淡のある学生双方が満足できる授業方法を工夫することは、それほど容易なことではあるまい。しかし学生側の要望の中には、発声や抜書のしかたなどすぐにも解決できそうなものもみられた。

文教大学教員の教育改善に関する調査では、教授法の研修経験が情報学部を筆頭はかなり高いようであり（小林勝法，前掲論文），この点は評価されてよからう。しかし授業方法上の問題点は授業内容の十分な理解を妨げる大きな要因の一つとなりうるわけであり，これまでの実績をもとに，さらに検討を進める必要がある。

4 もう一つのカリキュラム—学習サポート指導体制充実の検討

今回の調査では，学習活動そのものを支える指導を約9割の学生が求めていた。大学の大量化の中で，学部教育の実をあげていくためには，教育内容と方法の改善のみならず，学生の学習活動それ自体をサポートすることを検討していかざるをえないのではなからうか。これまでも大学では，教務部や学生部などを中心に，こうした活動がなされていなかったわけではない。今後はこのような経験を背景に，それらをより組織的，体系的に見直

し，教員と学生を結ぶもう一つのカリキュラムとして正式に認知し，学生が大学に寄せうる信頼源の一つとして位置づけていく必要があるものと思われる。

5 高校と大学との接続教育の検討

前記の，「もう一つのカリキュラム」の大きな柱が，入学初期の導入，準備教育，あるいは治療教育の検討であろう。

小，中，高校の三つの学校段階間の接続は，学習指導要領などによって一応の配慮がなされているといってもよからう。しかし高校と大学の間の接続は，正直な所，主として大学側に一任されているというのが実態ではあるまいか。大学教育を受けるのに基本的に必要な技能（参考文献等の探し方やレポートの書き方，要点のノート化など）や学部カリキュラムの内容によっては必要となる基礎的知識（国際学部では日本史受験入学者に対する世界史の基礎知識なども検討に値しよう）を1年生前半期などに習得できるように，配慮していく必要にせまられつつあるものと考えられる。

また，今回の調査では1，2年生や不満層に「パソコン，ワープロ，A V機器の使い方」の指導を求める声が高かった。こうした結果や機器類の普及動向をみると，学習メディアについてもしだいにペンや鉛筆といった伝統的なメディアと電子的メディアとの共存あるいは交替期に向って行くものと思われる。こうした状況変化をうけて，入学初期の導入教育の一環として，この種の新しい学習技術の習得についても検討を加えることがのぞましいものと思われる。

以上，今回の調査結果から得られると思われる検討課題を例示してみた。これらを見る

通り、その意味するところを一言でいえば、いづれも大学生の大衆化のスピードに、大学教育が必ずしも十分対応しきれていない、いわゆる「教育的遅滞」(Educational Lag) 解消のための課題を示すものといってよからう。これらは高等教育改革に関する他の参考文献でも指摘されている所と共通点が多いが、今回国際学部学生の声伝えるアンケート調査によって、改めてその必要性が示唆されたところに、意義があるものと思われる。その意味では、本調査は調査当時の学部全学生を対象とした、国際学部教育全体にかかわる学生評価の最初の事例を示すものとしても位置づけられるのではなかろうか。

なお小稿では紙幅の関係もあり、十分な構造的分析には立ち至らなかった。これはむしろ国際学部1～4年生全体を対象とした調査

結果を待ちたい。

また、今回の調査は'92年度の国際学部共同研究「大学教育改革と新しい大学モデルの構想」(代表 筆者のほか、塩田三千夫、田中慎也、小林勝法、小林信一)の一環として行われたものである。調査結果は速報として、本学部カリキュラム検討委員会(当時)のほか、学部全専任教員等に配付し、委員会や部会活動などの参考に供してきた。最後になったが、本調査に協力を得た関係の教員各位と学生諸君に謝意を示すものである。

(’93年11月3日)

注(1)本節は、一般教育学会第15回研究大会(’93, 6, 12)で報告した部分を含むものである。